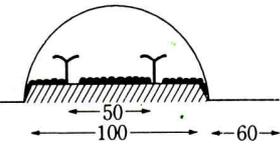


まきどき・植えどき・収穫どき
どきどき情報

4月

野菜の作業

種まき・植え付け	栽培管理のポイント	
<p>播種</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホウレンソウ ・コマツナ ・ブロッコリー ・シュンギク ・チンゲンサイ ・ニラ(株分けも) ・サヤエンドウ ・パセリ ・セルリー ・キャベツ、レタス ・ニンジン ・露地用果菜類、シソ等 <p>植え付け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バレイショ ・ウド、ミョウガ 	<p>【春野菜の保温と生育促進】</p> <p>春の野菜の早期出荷を目指した取り組みを皆さんにお願いしてきているところですが、春先は気象変動が激しく特に温度管理等に気を使う時期でもあります。</p> <p>ハウスなどによる「保温効果」については、どきどき情報 51号でハウスとトンネル被覆の組み合わせにより外気温に対して 15 程度も高く保つことが可能となるなどの事例や 68号では保温資材の紹介をしてありますので、参考にしてください。</p> <p>今回は、野菜の保護・生育促進をスイートコーンのトンネル・マルチ栽培を事例に紹介します。発芽及び初期成育を被覆内で保護・促進させ、7月上旬出荷を目標とした栽培で、播種は晩霜期から逆算し 30~40日前でうね幅 1m、条間 50cmの 2条うねで黒マルチをし、播種後 40日間、185cmのポリトンネルで被覆する。</p> <p>トンネルの様式には換気と無換気があるが、一般的には穴トンネルで、発芽後 1%程度の穴あき率で栽培し、生育に応じて被覆を切り茎葉を出していく。マルチの効果は地温上昇と土壌水分保持による発芽及び生育促進、雑草抑制と多面的で、スイートコーンにおけるその効果は極めて高いものがあります。</p> <p>トンネルの支柱はダンボールなどを使い、有穴ポリなどの被覆資材は風などで飛ばないように裾を留め具でとめるとともに、丈夫なビニールテープ等でチドリ状 又はたすき掛けにし杭に留めます。</p>	 <p>トンネルマルチの断面図</p>

定植時における省力・効果的殺虫剤の使い方

苗の定植時に関係しての殺虫剤(粒剤)の使用法としては、定植時の植え穴処理土壌混和方式や育苗期後半又は定植前日~定植当日などの株元散布といった方法があり、省力的であることや効果の安定性などに優れる等のメリットがありますが、今回はプラグ苗における使用法の事例を紹介します。

【プラグ苗(セル苗)】の定植時における処理方法

プラグ苗による使用としては、定植前日~定植当日や育苗期後半の株元散布等による方法があります。実際の使用法としては、セルトレーに所定の分量の農薬(粒剤)をできるだけ均一に散布し、葉に付いた粒を軽く払い落とすうえで軽く散水をするといったものです。

使用量は、品目・適応害虫・薬剤等によって異なりますが、おおむね 1株当たり 0.5~1.0g(場合によっては 1.0~2.0g)の薬剤が多いと思われます。したがって、128穴のトレーを使用している場合は、1トレー当たり 100gの農薬を散布すると基準内(0.5~1.0g)での散布になります。

なお、農薬の分量は「秤」等で確認しながら使用し、無駄の無いように使ってください。

そして、一番関心のあるところとしては、

プラグ苗(セル苗)処理方法 定植前日~当日に散布

その効果や持続性ですが、葉裏に隠れた害虫にも効果があることや天敵やハチに影響が少ないなどの特徴があり、薬剤の種類や季節にもよりますが、20日~1ヶ月程度の効果が期待でき、それ以降は慣行の防除体系による防除を行うことにより農薬の使用回数の低減にもつなげることが可能となります。



(日本曹達株モスピラン粒剤製品情報資料から引用。)

*安全・安心講習会の折に、農薬の「ひとつまみ」はおおむねどのくらいの量かといった話がありましたが、私の三本指でのひとつまみは、約 0.5g(農薬の種類によっても異なると思われますが。)でした。

「植え穴処理」などで定植する場合などは、自分なりに目安をつくって効率よく作業をすすめていただきたいと思います。(ちなみに、ペットボトルのキャップ 1杯では約 7gの粒剤が入りました。)



農業豆知識

展着剤の種類と使い方（特性を知って効果的に使いましょう！）

展着剤にはいくつかの種類があり、使い方によっては効果の上がない場合もありますので使い分けることが重要です。展着剤は農薬の物理性を増強したり、効果を高めるために用いられる薬剤で、それ自体農薬のような効果はないので補助剤として位置づけられています。

展着剤は、表のとおり大きく分けて、湿展性（表面に広がる力）の優れた非イオン界面活性剤、分散性の優れた陰イオン界面活性剤、付着性・殺菌作用を高める陽イオン界面活性剤、固着性の優れたパラフィン系展着剤の四つに分けられます。

展着剤の種類（商品は主なものの例）

	非イオン界面活性剤		陰イオン+非イオン界面活性剤	陽イオン界面活性剤	パラフィン系展着剤
	エーテル型	エステル型			
成分	ポリオキシエチレンアルキルフェニエーテル系など	ポリオキシエチレン脂肪酸エステルなど	アルキルベンゼンスルホン酸塩、リグニンスルホン酸塩などと非イオン展着剤との混合剤	ポリナフチルメタスルホン酸ジアルキルメチランモニウム、ポリオキシレン脂肪酸エステルなど	パラフィン+乳化剤など
商品名	アドミックス、アルソープ、クサリノー、ラビデンなど	アプローチ B I など	ダイン、トクエース、グラミン、クミテンなど	ニーズ、ブラボーンなど	アピオン E、ペタン V、ステッセル、バンガード V など
効果	薬剤の付着性、湿展性に優れ、被膜面を広げる効果が強い。濃度を高めると薬害が出たり、逆に被膜面が薄くなり、農薬の付着量が少なくなる。	薬剤の浸透力を高め、効力の増強・残効の強化効果がある。200 倍位の高濃度でも薬害がでない。	薬剤の水溶液で凝集（塊）を防ぎ、微粒子を全体に分散させる効力がある。	アプローチ B 1 の浸透力に付着性、殺菌力が強化され、薬剤の効力が増す。殺ダニ効果も高まる。	薬剤の被膜層を厚くし、付着量を多くする。固着性に優れ残効性を高める。
利用法	ヌレの悪い作物や水和剤に加用する。乳剤やヌレのよい作物には必要ない。	浸透力のある治療剤に加用する。特に発病後や殺虫剤に加用すると効果が高まる。	乳剤、水和剤には成分として混合されているので加用する必要はない。	殺菌、殺虫剤に加用。乳剤に加用しても有効。幼苗期、高温期は薬害が出やすいので避ける。	主として保護殺菌剤、予防剤の雨前散布に加用する。

以上のように種類により特性がありますので、農薬の種類等によって使い分けるのが理想です。

特に付着・湿展性を高める非イオン・エーテル型や分散性を高める陰イオン型の界面活性剤はむやみにいれると無駄になってしまいます。

乳剤のなかには、キシレンなどの溶剤が 30%以上、乳化剤が 15%程度含まれており展着剤の必要は無く、逆に付着を悪くしてしまう場合もあります。また、フロアブル剤には溶剤が含まれていないため加用してもよいが、乳剤と同じく付着・分散・湿展性がよいので一般的には界面活性剤を加用する必要はありません。水和剤でも最近では、分散性の優れた界面活性剤が含まれているが、薬剤が溶けやすくなるように入っていることから、薬剤や作物の表面張力を下げるほどは入っていないので、ヌレの悪い作物に水和剤を散布する場合には展着剤が必要となります。

具体的に使い分けの事例をあげて説明すると、保護殺菌剤では被膜層を厚くするパラフィン系展着剤がよく、固着力も高まり雨等で流れにくくなるとともに水をはじき病害虫の侵入しにくくします。

非イオン性の界面活性剤エステル型のアプローチ B I は浸透性を強める特性を持っていることから、殺菌剤の中の治療に主眼をおいた農薬を使用する場合に加用すると浸透力を高め、通常より短時間で薬剤を細胞内に浸透させるので散布後雨にあっても比較的効力が落ちず残効を高めることができます。

そして浸透力を高める非イオンのエステル型界面活性剤に陽イオンをもつ界面活性剤を加えたニーズは浸透力の増強ばかりでなく付着力も強化でき効果が高まりますが、農薬や使用方法によっては薬害が出やすいので、JA等の販売店に相談のうえ使用してください。

あさつゆ連絡先 電話:FAX 41-1062

技術事項作成協力：上小農業改良普及センター
中澤普及員 (25-7156)